

世界の無化と物象化の間で——後期西田存在論の基礎・再考
後期西田存在論の基礎・再考——世界、表現、主体¹

・新版『西田幾多郎全集』（岩波書店、2002 - 9年）の引用と参照は、漢数字で巻数・アラビア数字で頁数を示して本文中に埋め込む。

序

〈世界〉の概念が、後期西田幾多郎の哲学を大局的に方向づけていた、とまずは言うてよいと思う²。代表的な論文「絶対矛盾的自己同一」冒頭の数頁を眺めてみるだけでもそれは歴然としている。「現実の世界は物と物との相働く世界でなければならない」という一文で始まり、一貫して〈世界〉についての叙述という形式で論は進む。また「哲学の出立点」に関して、「我々は今日、元に還ってローギッシュ・オントローギッシュに歴史的社会的世界というものを分析して見なければならない」と言われる（八・372）。

そこで、後期西田哲学の基礎的再検討をもくろむ我々としては、彼が〈世界〉概念に関していかなる哲学的投企を行ったか、それを押さえることから始めよう。次の一文に率直に表明されていると思う。「私が右の如く云うのは、人間の理性とか自由とかいうものを軽視せうとするのではない、却ってその逆である。その根拠を主観的人間から奪って、之を創造的世界の創造作用に置かうと云うのである」（八・297）。理性（合理性）や自由を人間存在に内属する性質とは見なさず、「客観的」な世界に帰すこと、そしてむしろ世界の存在構造から人間の合理性を捉え返し、また自由の意味を再考すること——これが西田のプロジェクトである。ここにはすでに西田の根本的な思考様式が反映されている。というのも、合理性や自由をいわば世界に返してやるとしても、それが人間を抜け殻のように放擲することにならないのは、世界を単に主観に相対する理解対象としてではなく、世界理解の主体そのものを含み込む世界として、つまり自由と理性の主体を生み出す世界として把握するという態度によるのである。ある意味で単純な発想ではある——我々が理性を有するとすれば、それは、この世界そのものが合理性を生成するような世界だということなのだ……。すなわち、世界とは自己が「於てある」（「場所」としての）世界である。

投企の収穫を本格的に量るのは別の機会に預けなければならない。ここで行いたいのはもっと基本的な点検である。

¹ 発表内容をより適当に表示するように、副題を主題に替え、新たに副題を付した。

² さしあたり1933年の『哲学の根本問題（行為の世界）』をもって「後期」の開始とした。全集編者は「過渡期」としているし（六・389）、実際厳密な区分は解釈者の関心に相関してしか付けられないだろうが、主要なタームの変化や、（自己ではなく）世界の構造の考察を枠組みとするスタイルの確立などに鑑みるても、この前後一、二年程度をもって区切りとするのがまず妥当であろう。

自由と合理性の母胎としての世界に肉迫するにあたって、「自己自身によって動き行く真の実在界」「それ自身に於て独立する自動的な世界」(八・320)といった、世界のオートマティズムとも言うべき観念が西田の導きとなっている。世界はもはや、事物の総体とか、主体の働きかけに相関して何らかのリアクションを返す——かくて循環的に主客相互作用する——環境とかいったものではなく(少なくともそれに尽きるのでなく)、それ自身の存在と力動性において概念されねばならないのである。それでは、かかる世界の自律的力動性にはどのような規定が与えられているか？

「歴史的事実の世界は表現的に自己自身を限定するのである」(七・116)

「歴史的現実の世界と云うのは、機械的でもなく、生物的でもなく、表現的に自己自身を形成する世界である。かかる世界が創造的世界であるのである」(九・438)

かくして「表現(的)」ということが「歴史的世界」の運動を捉える鍵なのであるが、これは偶然ではない。同時代的な現象学や生の哲学また解釈学の影響もあって、西田は早くから(彼の代名詞とも言うべき「場所」の概念を提出する以前から)表現について論じていたが、その当初から“表現の「客観性」”が重要なモチーフとなっているのである。表現が「世界」に帰されるのも自然な成り行きだったのである。このモチーフは、途絶えることなく、いわば彼のテクストにおけるライトモチーフとして、最晩年に至るまで、ときに意味内容の変遷を伴いながら次第に存在感を増していく。その中でその変遷を細かに辿り尽くすことは叶わないが、まず必要なかぎりでの「客観性」に焦点を当てるのが探求のガイドになってくれるであろう。その「客観的表現」の解明の上に、世界の自律的力動性の内実を照明し、それを主体性との連関において把握すること——すなわち、世界・表現・主体をめぐる基礎的な概念布置を確認し、後期西田哲学の戦略地図を簡素に再現することが、本稿の課題である。

一 表現の「客観性」

さて、初めて表現を主題としてとりあげた論文「表現作用」の冒頭で、表現現象は、表現自体(事物としての表現)、表現の内容、表現の作用、の三項に分析される。西田はこれを言語で例解し、言語表現、意味、言表作用(発話)、の三項となる。この三項図式で言表による相互理解を考えると、「我々の精神の中に本質的に共同的なるものがあって、言語という符号によって互に相認めると考えざるを得ない」(三・375)。言語記号という「非人格的」な事物すなわち「客観的表現」を通じて、「本質的に共同的」な思想すなわち「客観的思想」を交換すると言うのだが、この二つの客観性は結局同じものに根ざす。「思想が思想となるには一度、公の場所に持ち出されなければならぬ、他人との共同の場所でなくとも、少くも自分自身の心の公の場所に持ち出されなければならぬ。之が言表である、言表は思惟の結果ではなく寧ろその成立条件とも云い得るであろう」。思考は本質的に内的独語の形で言語に依存しており、かくして「純なる思想は言語に云い表された命題自体の如きもの」であり、「純なる思想は我々の思惟作用の中に含まれているのではなく、寧ろ言語の

世界に宿っているのである」。(三・375-6——以下、強調はすべて引用者)

第一に、「表現」が言語をモデルに考察されている点を押さえておこう。言語は表現現象一般の中で際立って判明なモデルを与えてくれるので当然とも言えるが、後で確認するライプニッツ受容の布石と見えなくもない事実である。なるほど西田はこのあと芸術表現や身体的表現の分析を行い、それらを三項の内の複数項の「統一」によって特徴づけるが、統一の意味を規定する三項図式自体が言語モデルである点は動かない。

第二に、西田の所見は、言語主義と連合した意味のイデアリズムとでも言うべきものであろう。個別具体的な表現現象、例えば言表による相互理解は、「命題そのもの」ないし「言語によって表現せられる意味の世界」「永遠なる世界」(三・382)が現象する(意味自体にとっては外的偶然的な)機会に過ぎないわけである。つまり、この時点では、個々の表現作用の偶然性を超越した表現内容(意味)のイデア的な同一性・普遍性に、表現の客観性があると見られた。かかる意味での「客観性」は、同意するか否かは別として、了解できるものではあろう。

ところが、後期の表現論は大幅に力点を変えている。表現は「客観的作用でなければならない」(七・109)と言われるように、前期とは違ってまず作用の契機が強調されるが、その作用というのは「客観的表現として我々に対して立つものは単に了解の対象たるのみならず我々の自己を動かすものでなければならぬ、我々を唆すもの、我々に命令するものでなければならぬ」(六・140)。あるいは「歴史的現実の世界は表現的な物の世界であるのである、物的表現の世界である。私の客観的表現とは物的表現を意味するのである。…我々の行為は物的表現の世界から惹起せられるのである。そこに我々の行為的自己があるのである」(八・278)。「客観性」の内実は、もはや意味のイデア的超越性ではなく、自己(行為主体)を限定ないし創出する作用にこそある。かかる観点に立つことについて、具体的には、言語の本性について述べた次の箇所が参考になろう。「言語は単なる知的内容の表現ではない。言語は固独語的ではなくして、会話でなければならない。言表は先ず命題というのではなくして、命令と応答という如きものでなければならない。我々の社会的生活そのものの自己限定の内容として、表現の内容というものが成立するのである」(六・257)。言語表現の意味を、表現の公共的使用という面から考察する点で、これは前期の(内的独語を本質的と見なす)見解とは一線を画するものである。

とはいえ、これだけでは考察のごく一般的な指針という程度のものであろう。実際、我々の見るところでは、「客観性」の新たな意味に理論的支柱が与えられるのは、つまり表現現象のメカニズムに関して意味のイデアリズムに代わる説明装置が与えられるのは、後期哲学が展開し始めて数年が経ってからである。

注目すべきは、論文「歴史的世界に於ての個物の立場」(1938年)以降における、「表現」のライプニッツ的規定の導入である³。すなわち「表現する」とは、「一つのものに於ての

³ ライプニッツ受容が後期西田に与えた影響について、詳しくは次を参照。板橋勇仁「日本の哲学からみたライプニッツ——後期西田哲学の中での転回に即して」、酒井潔・佐々木能章・長綱啓典編『ライプニッツ読本』、法政大学出版局、2012年。ちなみにこの時期以降、ライプニッツは西田が最も共感を寄せる哲学者となった。「右の如き表現的實在の深い

不変な規則立った関係が、他のものに於ても云われること」(九・315)あるいは「一が他の秩序を表すと云うこと」(九・457)であると。(とりわけ前者の、アルノー宛書簡の一節の引用はおびただしい⁴。)表現関係を、記号と対象の対一関係ではなく、記号の関係(秩序)と対象の関係の一致、つまりは同型性とか構造的対応関係と見なす点にライプニッツの表現概念の特徴があるが⁵、西田もこの理解に立って援用している。つまり、表現とは孤立した二者間の関係ではなく、ある秩序と別の秩序との対応、「比例的」ないし「函数的」な関係(十・98-9)であって、各々の秩序は個々の表現主体(例えば言語使用者)の恣意によらず自律的なのである⁶。

ライプニッツ導入のポイントは、第一に、これが表現のいわば主観主義的理解に対する批判に動員されることである。「由来表現作用と云うことが、単に個人的意識の立場から唯主観的にのみ考えられている。しかし我々が表現作用的に働くと云うには、そこに一定の形式がなければならない、云わば固定せる形がなければならない。これは個人的意識の総合から成立せるものではない」(九・148)。「形」というのは西田の術語だが、表現の規定の文脈ではライプニッツの「不変な規則立った関係」と置き換え可能である(八・322)。西田が批判する「唯主観的にのみ考え」る立場とは、表現を「主観的意識内容を外に発表するとのみ考える」(九・125)立場、つまりは表現を主観とか意識の内にすでに存在する内容を「外」に出すことと捉え、その内容を記号と結合して「発表」する意識の綜合作用に表現を基礎づける立場であろう。ライプニッツ的な表現概念に拠るかぎり、主観性に対して自律した形(形式)——西田は表現現象に関わるそれを広く「論理」とも言う——に規制されて表現は成立する(九・152)。表現の「形」が主体の表現行為(またその意志)を支えるのであって、その逆ではない。

ここに、表現と主体の関係の基本的構図が見える。そもそも後期西田においては、個物は「表現作用的に働く」(八・385)、あるいは「我々の行為はすべて表現作用的性質を有つ」(八・27)とされ、一般に表現が個物(主体)の働きの不可欠の契機とされる一方で、表現は主体の権能に属するものとは見なされず、むしろ「我々の行為的自己の存在というものは我々の意識とか身体とかを離れたもの、一言にて云えば我を離れたものによって媒介せられねばならない、即ち表現的なるものによって媒介せられねばならない」(六・266-7)と言われる。主体性を媒介する表現が、主体を「離れた」独自の秩序を有している

考に、始めて到達した人としても、ライプニッツを推さざるを得ない」(九・418)。「表現と云うことは、従来の哲学に於て、ライプニッツを除いては、実在に本質的なものと考えられていない様であるが……」(九・468)

⁴ ざっと挙げておくと、八・315-6、322、355、九・315、437、十・191-2、など。ライプニッツの原文は、ゲルハルト版哲学著作集、第二巻、112頁(『ライプニッツ著作集』第8巻、工作舎、1990年、358頁)。

⁵ 注5のアルノー宛書簡該当箇所を参照。また以下も参照されたい。「対話——事物と言葉の結合、ならびに真理の実在性についての」、『ライプニッツ著作集』第8巻、15-6頁。「観念とは何か」、同書20-1頁。

⁶ 「ライプニッツも、表象 idea は事物の模写ではなく、その表現である。両者の間には、相似性があるのではなく、表現による対応性があるのである、即ち記号性があるのと云っている(Quid sit Idea)」(九・419)。

——ライプニッツ受容以前にも主張していたこの点に、西田はいまや“表現するものと表現されるものの「形」の対応”という規定を与えることができたのである。かくて、表現の意味作用の自律性・公共性という後期表現論の基本的観点が理論的支えを得た。

表現の理論において、諸表現の公共的使用と体系的連関を重視し、意味作用の根拠を意識や主観の作用に求める代わりに、むしろ体系的連関に基づくその自律性を認める——このような説明装置をもつ表現論を「記号論的」と特徴づけることは許されよう。周知の通り、ライプニッツの表現概念は彼の記号思想と不可分であるし、西田自身も元々言語をモデルに表現を考察し、またやがて歴史的世界における表現の次元を指示して「記号的表現面」「象徴的表現面」と呼ぶに至る⁷。西田にとって「表現」よりも「記号」のほうがより基礎的な概念であるというわけではないが（そして一方が他方の基礎になるような関係にはないのだろうが）、同時代に流通した表現論と区別して自らの表現概念を際立たせるときには記号概念に依拠していたとは言える。我々が敢えて表現の記号的性格に強調するのはそのような概念使用の背景を重視し、解釈のポイントを明確にしておくためである⁸。

⁷ 西田にとって言語的記号は特権的であり続けている——「矛盾的自己同一的世界の記号的自己表現面と云うのは、固、言語的表現の世界である、概念の世界である。かかる世界の自己矛盾の形が論理である」（十・186）「知識というのは、歴史的現実の記号的自己表現、広義に於ての言語的表現……」（九・453）——が、「広義」の「言語」は「数学的符号の如きもの」をも含む（九・284）。また、「記号」の範疇は、数学・論理学の記号を極とする一般性の高いものから、芸術作品を極とする個別性・特異性の高いものまでの幅を許容する（431-2）。本稿で特別な断りなしに「記号」と言うときも、この広義の、つまり本文中で見た意味での「表現」をなすもの一般を指す。つまり、普通の意味での（象徴的な）記号だけでなく、たとえば雷鳴とか症候のような徴候のないし指標的な記号をも含むものとする。

⁸ 西田における「表現」の主題の重要性は広く認められている一方、その記号的性格が注意されることは少ないようである。例外として、「表現作用」を「記号的操作」である「変換」（transformation）と見なす下村寅太郎の解釈（「西田哲学における弁証法的世界の数学的構造」、『下村寅太郎著作集』第12巻、みすず書房、1990年、198-200頁）、および「記号的表現面」についての板橋勇仁の議論（『歴史的現実と西田哲学——絶対的論理主義とは何か』、法政大学出版局、2008年、第三章、五節）を参照。

また、後期西田のライプニッツ受容を考える際、彼の教え子下村の媒介は無視できない。西田がライプニッツの表現の定義を導入するのは1938年8月の論文「歴史的世界に於ての個物の立場」（前半部——後半部は9月）においてであるが、同年5月、下村は日本初のライプニッツのモノグラフィー『ライプニッツ』（弘文堂）を公刊し、西田に手渡している（二十二・142）。西田が上の論文以来、表現の定義として頻繁に引用するアルノー宛書簡の一節も、この書で二度引用されている（『下村寅太郎著作集』第7巻、みすず書房、1989年、114頁、141頁）。そもそもこの本は、田邊元が監修し、主に西田・田辺門下の若手研究者たちが執筆と編集を担当した「西哲叢書」中の一冊であるが、そのような事情は措いても、同年初め頃からライプニッツへの関心を深めた西田が下村からたびたび教示を得ていることが書簡から確認できる（二十二・105、132）。また下村書におけるライプニッツの紹介の仕方も、記号思想および表現（表出）概念こそライプニッツ哲学の基盤であり、それは単に所謂記号の研究ではなく、存在一般の記号性・表現性の解明に通じていると力説するものであり、西田への影響を強く示唆する（下村前掲書、115頁）。とはいえ、以前から西田にとっても表現概念は一貫して重要なものであり続けていたこと、そして形成期の下村がその彼から近しく学んだことを思えば、下村のライプニッツ解釈における「表現」への着目自体が、西田からの影響なしとは言いきれない。いずれにせよ、未公刊の下村側の書簡に思想的な興味が引かれるところである。

二 表現と主体

(1) 反復、あるいは表現的形成

さてしかし、今確認したのはあくまで表現作用を規制するメカニズムの規定であって、作用としての実質にはまだほとんど触れていない。実際、西田のライブニッツ受容の効果は、単に表象システム一般の本質的性質ないし条件の理解にはとどまらない。西田はそこにいわば過剰な読み込みを行って自らの別の概念系と接続していくのである。それを確認しつつ、主体を限定・創出する作用としての表現について改めて検討しよう。

西田は、アルノー宛書簡における表現の定義を“同じ関係＝形が両者について言われること”と読みとっているが、それをさらに、“同じ形の反復”と読み替えている。表現の核心は、「物と物との間に、同じ関係が、同じ形が繰返されること」(十・158)である(むしろ、「同じ」は「対応」の意味)。言い換えれば、西田は表現を事物間の静的な「関係」として捉えるよりも、動的な作用、働きの一面として刺し止めようとする。それは何よりも反復運動、形が反復すること、すなわち「形作られる」という仕方で事物が生成する運動——「形成」の一面なのである。つまり、表現(記号)と所謂“意味作用”と解される限りでの表現作用を、「表現的形成」のトータリティから再規定しようというわけである。「ライブニッツの表現というのは、主知的にして、唯映すとか、記号的に表現すとか云うのであるが、表現すると云うことは表現作用的に働くことでなければならない」(八・322)。「形成的と云うことと表現的と云うこととは、不可分離的である。……表現と云うことの一面に、形成と云うことがなければならない。……形成と云うことは、必ず一面に表現と云うことであり、形成は表現的形成である」(九・420)。

「表現的形成」のポイントを理解するためには、「形」の概念を押さえておく必要があるだろう。「形」はかなり広範な文脈で適用されているが、基本的には「一と多」の対に即して規定されている。形は、「多」なる要素が一定の仕方で「一」にまとまっている統一態(「多の一」)における、その仕方を指す。ライブニッツの「不変な規則立った関係」と互換的に用いることができたのはこのゆえである。この一般的規定の上に、「論理」「種」(八・42、331)「パラディグマ(Paradigma)」(八・375、443)「形相」(九・23)「ゲシュタルト」(九・387)といった概念がさらに重ねられて使用され、概念の系列をなしている。

例えば、ライブニッツ導入以前、1934年の論文ですでに「行為の形相」という言葉が使われている(それは「客観的に可能性を有ったもの」「客観的条件に従って構成せられるもの」である(六・264))。西田は「大工」と「家の形相」という例を挙げているが、行為一般を念頭に置いた記述であることから、こう解釈することができよう——行為とは、記号的に了解された行動プログラム(行為の形相)に従って運動が制御・統合され、同じ「形」を有する出来事が「形作られる」こと、かくして形が反復することである。このとき、行為の意味理解(意味作用)としての表現作用は、出来事の生成という全体(表現的形成)の中の不可欠の契機として位置づけられる⁹。さしあたり「運動」とした、行為の形を構成

⁹ 以下も参照——「我々の行為が単に合目的的ではなく、目的を意識した動作と考えられ

する諸部分は、身体的過程（筋肉運動や神経過程等）や道具や作用対象物や他人などの多
種の要素であろう。表現作用とは、これら諸要素の統合規範たる「行為の形」の記号的了
解である¹⁰。「形作られる」というのは、むしろこれらが無限定な質料とか「意志」の印章
を押し付けられる意志実現の透明な媒体だというのではなく、反対に、それら自体が固有
の秩序（典型的には因果性）を有するからこそ、形の対応＝反復が成立し得るのである。
後期西田が行為一般を「表現作用的」とすると同時に「制作（製作）」「(形) 作ること」「ポ
イエーシス」とも特徴づける理由は、このような解釈のもとで初めて額面通りに理解でき
るだろう——行為とは出来事の制作なのである¹¹。このとき、表現の客観性、つまり「行
為の形相」が「客観的条件に従って構成せられるものである」ということは、行為の成否
や内実は行為主体が独占的に決定できるものではないということの意味するだろう。言い
換えれば、歴史的出来事としての行為は、原理上「公の物」（八・446、また十二・347）、
公共的なものである。客観的表現の「形」が主体の表現行為（またその意志）を支えるの
であってその逆ではない、とは先にも述べたことであるが、それはここで改めて制作とし
て把握された行為一般についても同様なのである¹²。

かくして、「表現的形成」のトータルな理解の下で、「客観的表現」（記号）は「形成作
用」を「媒介」する（その媒介作用が所謂「意味（作用）」である）、と位置づけられる（八・
276 - 9）見取り図としてはごく単純である。言われているのは、我々が世界を認知しつつ
その認知を介して世界の中で活動する、という当たり前の事態に過ぎない。ただ、その事

る所以である。……我々の行為が意識的であるということは、意味充実作用の意義を有っ
ていると考えることができる。行為は何処までも意味的存在ということができる」（六・
179）。

¹⁰ ここで“記号的了解”と言うのは——「表現」との循環的な説明にならざるを得ないが
——実際の行動の際に行動プログラムの全体を意識している必要はなく、行為の形を表現
する（「対応」する）記号を意識してればよいことを意味する。これはほぼトリヴィアルな
指摘に属するだろうか。実に身体制御だけとってみても、むしろすべてを意識して行うの
は不可能であろう。例えば、斧で木を切り倒すときには、木の幹についた切れ目が記号機
能を果たすであろうし、ボクサーにとっては相手の身体の特定期位や予兆の動きが、ピア
ノの初心者にとっては鍵盤が、プロのピアニストにとっては音色が、あるいは、私は料理
を作るとき、まず切るべき材料をすべて目に見えるように用意するのだが（よく材料を使
い忘れるからだが）、これら一連の材料が、その都度その役目を果たすであろう。明らか
のように、同じタイプの行為においても、何が記号機能を果たすか、つまり表現作用（意味
作用）の内実は、習熟の度合い等の事情によって変わるはずである。

¹¹ 制作物すなわち「歴史的出来事」「歴史的物事」は有体物に限定されない、というより、
その範疇は極めて広い。「そういう大工の動作ばかりではなく、無形なるものの場合であ
っても皆同じである。私の働くとか制作と言うのは広い意味で言うのであって詩人が詩を
作るのも制作である」（十二・346）。「夢みることも、歴史的出来事でなければならない」（九・
425）。

¹² つまり「形相は大工の頭の中にあるのではない」（八・150）わけであり、これは言語の
公共性の承認と相通じた理解であると言える。ここには、行為を出来事一般の種として差
別化するために訴えられる、「意図」の如き特別な存在者とか心的状態の居場所はない。行
為は「単なる出来事」に何らかの「追加の特徴」を付け加えたものなどではない、という
Ford の診断を参照されたい。Anton Ford, “Action and Generality”, in Anton Ford,
Jennifer Hornsby & Frederick Stoutland (eds.), *Essays on Anscombe's Intention*,
Harvard University Press (2011), pp. 76-104.

態そのものを当の世界に生起する出来事として捉え返す（歴史的世界が表現的に自己自身を形成する）、という観点に立ってこれを把握し直すことが問題なのである。そうして、歴史的世界における運動が表現に媒介されており、しかもその表現とは世界の外から世界を映すものではなく、世界そのものに属する「客観的表現」、すなわち「歴史的世界の記号的表現面」である、という構造が浮き彫りになったわけである。ここに“合理性の根拠を世界に置く”という投企の実質を見ることができよう。

（2）形の実在性

さて、ここで「形」に関して重要なのは、「一」と「多」のいずれかが「多の一」の一義的な基礎であるわけではないこと、あるいは、一方が本質的であり他方が外的偶然的であるわけではないということである。正確には、そのような一方の優位は、あったとしても局所的な秩序にすぎず、実在全体を覆っているわけではない¹³。それをして、形は「多と一との矛盾的自己同一」（八・374）と言われる。（八・374）

かかる存在様式をどう理解すればよいのか？ 「神による予定調和の如き仮定を取るならとにかく、一が多となると云うことは一が一自身を否定すると云うことである如く、多が一となると云うことは多が多自身を否定することでなければならない」（八・311）。一つの形はその要素たる多の自己否定として成立する、とまずは言えるのだが、それは単に元々あった多が「無となる」ことではないのは「一が一となることは、多を含むこと、多を構成すること、多を生むことでなければならない」（八・321）のだから当然である。単純な交通標識のようなものでも、それを構成する一々の直線とか色だけが注意されるのではなく、そうした「多」（つまり他の諸解釈）が抑圧されて「一」としての統合のもとに現れなければ表現＝記号として作用しないだろう（そして、かかる形がまた、諸々の標識相互の連関＝形に組み込まれた「多」の中の一つ（＝「一の多」）であろう）。あるいは、隠し絵の中に図を発見する——パターンが自ずと浮上してくる——ようなことを思い浮かべてもよい。かくて、多の「自己否定」としての形の生成は、「多が多自身を否定することが真に多が多となることであり、一が一自身を否定することが真に一が一となること」（八・313）、結局は「形が形自身を限定する」（八・321）ことであって、これを言い換えるとしても、せいぜい、多が自らを自律的に一へと取り集める、とでもするほかないだろう——ただし、その多というのは、生成した「多の一」の形に即して遡及的に指示されるほかないことに留意せねばならないが（それを忘却すれば多が基礎として措定されることになる）¹⁴。かかる「一」にも「多」にも還元されない「形の実在性」（八・3231）は、西田が

¹³ 「現実の世界は多の一として決定せられた形を有った世界でなければならない。之を何処までも多から一へと考えるならば、そこに製作という如きものを入れる余地がない。これを一から多への世界と考えると、それは何処までも合目的的世界たるを免れない。唯自然の作用あるのみである、生物的世界たるに過ぎない」（八・370）。同様の内容のより具体的な記述として、八・320-1を参照。

¹⁴ この点、ハイデガーが、ギリシア語の語源的考察から「ロゴス」に「集めること・集約」（Sammelung）の意味を見出していることは示唆的である（川原栄峰訳『形而上学入門』、平凡社、1994年、203-4頁）。というのも、この後ハイデガーは集約としてのロゴスに関

繰り返し強調するところである¹⁵。

(3) 主体の実在性

この論点の重要性が際立つのは、個物・主体の存在を考える局面においてである。西田にとって、あるものが「形」を有するということが、それが「物」（「歴史的物」「歴史的出来事」）である、すなわちそのものとして実在的である、ということと同義である（「物とは形を有ったものである」（八・39）、また同様の記述として、七・138、八・321）。なぜなら、西田にとって実在とは「働くもの」であり、そして「形を有ったもの」が、表現的形としての「働き」を帰属され得る単位であるからである。言い換えれば、実在的な「形」を有する事物の作用たる表現的形は、その「物」以下の部分の作用や、その「物」の以上の、それを部分として含む全体の作用には還元されない。

もはや明らかであると思うが、つまりは個物とその働き、すなわち主体とその行為の実在性が確保されるのが、この「物」の一水準としてなのである。すなわち、「表現的形」の概念に賭けられているのは、個物の一性に即して指定される働きのリアリティである¹⁶。かくして、「客観的表現」が主体を限定・創出する効果は、単に主体を制約するというだけでなく、主体の存在そのものにとって本質的なのである¹⁷。これを西田が斥ける立場から逆に特徴づけるなら、多を基礎と見なす方に、一切の秩序をアトム的な多の關係に還元する機械論的世界観があり、一を基礎と見なす方には、生命活動に見られるような合目的性、すなわち有機的に組織された全体性に部分的多が従属する目的論的世界観があり、いずれにおいても個物的な「多の一」の水準に実在性は認められず、すべての活動は個以下の物理的因果性か、個を超えた（個別の行為ないし個体の水準を越えた一般的な——例えば生存とか種の繁殖といった——）全体性に回収される、ということになる¹⁸。かかる一義的秩序が支配する世界観を斥け、西田としては、あくまで形と個物をリアルなものと考えたいわけである。ある箇所ではアナクロニスティックに響くことを承知で「形相因」という

して第一にヘラクレイトスの断片を検討するわけだが、実は西田もまた、ヘラクレイトスに「歴史的実在の世界のロゴス」（八・21）「一即多多即一の弁証法的自己同一の世界」（八・190）「不調和の調和、矛盾的自己同一の形」（八・331）を見出しているのである。

¹⁵ たとえば、「ライブニッツのモナドの世界は単に表象的なるが故に、種は合成的として、それ自身の独自性を有たないのである」（八・348）という仕方ライブニッツを批判しつつ、実在的な種の存在を主張している。

¹⁶ この水準、すなわち「個性的な形」（八・42、また八・186—8、199、319などを参照）の内実については別の機会に詳しく論じたい。

¹⁷ これは別段、自己の自発性の否定とはならない。むしろ他ならぬ自己として働くときにこそ表現に媒介されていなければならないという意味で、自発性概念と親和的であると言える。必要条件あるいは十分条件と言えるかどうかは「自発性」の十全な規定次第であろう。

¹⁸ 西田の見るところでは、表現の主観主義的理解も、表現を合目的性から理解しようとすることに由来する（九・125—6）。つまり、そのような考え方は、意志を目的を充実する作用と見た上で、かかる意志概念に即して、主観の内にすでに存在する内容（目的）を外へ「発表」する手段として表現を規定するわけである。そこには西田的な意味での表現（的形成）の客観性・公共性はない。

語まで使っている（九・22）。

三 形の存在様式再論

しかしながら、形の実在性・自己限定的存在様式については、より突っ込んだ議論が必要であろう。というのも、ここには、表現内容のイデア化の代わりに、事物や記号の規則ないし秩序のイデア化に問題の場所が移っただけではないか、という嫌疑の余地があるからである。いまや意味の代わりに「形」が、「世界」にいわば作り付けのものとして、無限の反復可能性を備え、表現作用の「客観性」の根拠になるものとして、イデア性を担っているのではないか？あるいはライブニッツにとっては、それで何の問題もないのかもしれない。しかし、西田においては、世界は秩序の充満した場所と前提されてなどいないし、「神の予定調和という如き考を棄て」ることで「彼の考に今日尚生きた意義を見出し得るであろう」（八・317）とさえ言っていたではないか？

表現と主体という我々の課題に即して、問題をこう立て直そう。行為の形相にせよ他の形（例えば知覚対象の形や思惟・推論の形）にせよ、我々の活動を限定する効果を発揮するためには、予め熟知・習得されていなければならないわけであろう¹⁹。しかるに、我々が先に“記号的に了解する”などと言い表したこと、すなわち「形」の認知（再認）ということを考えるとき、この「形」の身分はどうなっているのか？すなわち、そもそもいかにして反復可能な「形」が我々に与えられるのか——形を有ったものが現れるという、表現の始原はどうなっているのか？それをたずねていけば、結局のところ、与えられるべき「形」がイデア化されるか、そうでなければやはり現象の無限定な多様を統一する（死せる記号に意味付与する）主観の綜合作用が、言うなれば統一性の原型たるイデア的主観性が見出される（超越論的に措定される）のではないか？

西田がこのいずれをも拒否しているのは間違いない。というよりむしろ、形の自己限定的生成、すなわち「形を有ったもの」と意味作用の生成を認めることが、まさに形の概念の賭け金なのである。「由来、人は物の生成そのものに就いて独自の意義を認めない」（八・329）のに対して、西田は「創造的原理」「真のイデア」としての「形」の概念をもって、生成に正当な位置を与えると言うのだ。

まず一方で、表現が本質的には主体と無関係な自然的過程だということではない。つまり、表現から認知（再認）の契機を還元して、純粹に自然事物間の関係として規定可能であるとは、西田は考えていないと思われる。それが証拠に、表現論全体が「行為的直観」という別の重要概念と表裏一体になっている。世界それ自体の運動として語られる「表現的形成」を、我々の経験の観点から捉え返すのが「行為的直観」であると言ってよい。すなわち、「物が表現的だと云うことは、物が表現作用的に見られると云うことであり……」（八・278）「形が独立的であると云うには、形が見られなければならない」（八・119）とあるように、表現にとって、またそれを規定する形の存在にとって、「見ること」（直観）、その形

¹⁹ 「習得」に関しては、近々刊行予定の拙稿「表現と習得——西田幾多郎の身体論について」、『西田哲学会年報』第17号、2020年7月を参照されたい。

が認知・承認されることは本質的である。「表現的に自己自身を限定する世界は行為的直観的な世界であり又後者は前者である」(八・349)。ちょうど、命令は、命令として聞かれないかぎりには、命令内容の実現・非実現かにかかわらず命令として作用していないようなものである。(逆に、命令として聞かれる限りは、命令内容が実現しなくても有効に作用し得る。20)あるいは、隠し絵の例を想起してもよい。

しかし他方で、やはり表現作用に先立つ意識や主観性の作用が「形」をまさに反復可能なものとして構成するというのもない。もしそうであれば、西田が拘った「物」あるいは「個物」のリアリティも、統覚的主観(あるいは相互主観)の作用の派生物であり、主観性それ自体と比べれば二次的なものに過ぎぬことになる。

それでは形はどのように現れる＝見られるのか? 可能な答えは一つしかないと思う。我々はただもう一度、表現的形成のあり方を凝視するしかない。それは反復運動である。反復するのは形である。つまり、表現的形成とは常に、ある「形を有ったもの」がすでにしてある形の反復という資格で現象することなのであり、言い換えれば、現に一つの反復として反復可能な形が「見られる」こと、ある形が繰り返し同一者として認知されるべき形として認知されることである。だからこそ形の成立は「形が形自身を限定する」という仕方、文字通り反復の観念なしには語り得ない事態なのである²¹。初めからそうなのであって、つまりその「初め」は発見的創造と言うほかない。

それは、第三の解決の提案というよりは、そのような「解決」の不在を認め、せめてその不在の意味を照明する議論であると言ったほうが適当であろう。すなわち、形の反復可能性の根拠は行為的直観の出来事それ自体にしかない。出来事それ自体が、ある反復可能性を際立て、秩序を生成するのであって、それは「世界が自己自身を闡明して行く」(九・418)とでも言うべきことなのである。西田における直観、主観、客観の概念の配置はかかる事情を明らかに示すものである。すなわち、直観とは、

「我が物の世界に弁証法的に含まれることである、客観の中に主観が含まれることである。故に直観はいつも行為的直観であるのである。……我のない所には、直観というものもない。直観ということは、物の世界の自己否定として我が物の世界から生れることである、物が我々の行為を惹起することである」(八・262-3)。

つまり、直観においては「我々に与えられるのではなく、寧ろ我々が与えられるのである」(九・450)。主観と客観があつて、主観に客観が与えられる媒介事象(直観・表現)がある、というのではない。「自己自身を表現的に限定する個物が先づあつて、その相互限定と

²⁰ 菅野盾樹『いのちの遠近法——意味と非意味の哲学』、新曜社、2000年、154頁。また第一節に引用した、言語の本性を「命令と応答という如きもの」と見なす西田の論述を参照(六・257)。

²¹ デリダはフッサール『論理学研究』を批判的に読解する中で、意味作用から反復可能性を決して還元できないことを示している。Jacques Derrida, *La voix et le phénomène*, PUF, 1967, ch.4 (高橋允昭訳『声と現象』、理想社、1970年、第四章)

して直観が成立するというのではない。連続なくして非連続というものもない。直観が成立する、行為的に物が見られるということが、無数の物と物とが表現的に相限定することである」(七・121)。形が現れることで、つまり何が「物」として作用するか、何が・どのように「客観」としてアプローチ可能であるかが浮き彫りになることで、それに従って行為主体もまた輪郭を得て、自ら「働くもの」として自覚されてくるのである。(形は我々の行動のパラディグマ(範型)である(八・147、331))。それゆえ、誤解されてはならないが、例えば知覚出来事としての行為的直観は、知覚対象という原本の「形」をコピーする(反復する——しかし何に?——意識とか心?)ことではなくて、まさしく知覚出来事の「形」(知覚出来事において見られる形)が、知覚行動的主体(自己)と知覚対象(物)とを構成するのである。あるいは、知覚出来事の形が現れるということが、相互作用する主観と客観の成立そのものなのである。

以上はまた、“表現が主体を限定・創出する”ということの論理的核心を説明するものである。すなわち、たしかに「我のない所には、直観というものもない」としても、その「我」は行為的直観の出来事に遅れて(条件づけられて)立ち上がる——より正確には、主/客の分節と相互作用の様態そのものが、見られた「形」に即して決定されるのであり(つまり、主客の「形」の対応関係が成り立つのであり)、その逆ではない。ある形を繰り返して世界に発見できるのは、行為的直観が初めから一つの反復可能性の発見であるからであって、例えば形の構成部分(多)の識別も現象の理解を増進しはしても現象の根拠を与えるわけではないし、構成部分の同定がまた一つの形(多の一)の認知であらざるを得ない。かくて結局、この概念連関の中で「形」の背後にまわることはできない。まさしく「行為的直観の極限の立場に於て考え」られた、「真の自己に直接の世界と云うのは、我々の自己がそこからそこへと考えられる世界である」(九・417)。

もちろん、反復適用される形はある意味では反復運動自体を越えたもの(反復を通じて同一者に留まるもの)であって、ひとたび習得されたならば、所謂記号として対象化されることもあり得るが、するとあたかも反復運動から遊離して同一性を保ち、あるいはその同一性こそが初めから運動のテロスであったかに見えてくる。これが大雑把に言って、しばしば記号実践の本質がイデアの意味を志向する作用であると思われる所以であろう。しかるに表現の生命はどこまで行っても形を自己開示する出来事にしかないのである。西田もかかる厄介な事情に注意を促している。「見られる形というのは、作用を越えたものである。それは表現的である、而してそれは象徴的、符号的にまで押して行くことのできるものなのである。しかしそれは何処までも作用と離れたものでなく、作用と自己矛盾的に結び附いたものである」(八・279)。そして「歴史的形成の世界に於ては、超越的なるものが内在的に働いているのである。無論超越的なるものが内在的たることはできない。それは表現的に(象徴的又は符号的に)働いているのである(かかる意味に於いて意味が実在的なのである)」(八・278)²²。ここに苦心して述べられていることを銘記すべきであろう。

²² 記号的存在および反復する現象一般に独自の存在様式(同一性のあり方)を認める、という議論に関しては、次の研究から教えを得ている。田島正樹「分析論的領域と説明概念(承前)」、『東北芸術工科大学紀要』第8号、2001年、152-160頁。

結論

明らかになったことを簡潔にまとめ、序節に設定した課題への答えとしよう。

- ① 「客観的表現」の客観性は、表現のメカニズムに着目したときには、「形」に規定された構造的対応関係、という表現関係の規定を指す（1938年のライプニッツ受容以後）。
- ② また、「客観的作用」としての表現に着目したときには、表現は「表現的形成」という全体性において、「物」の形成ないし制作を限定・媒介するものとして位置づけられる（表現の意味作用とはこの媒介作用である）。
- ③ 表現的形成という様式における、他に還元不可能な働きを帰属されるものとして、個物すなわち主体は実在的である。
- ④ ただし、表現的形成＝行為的直観の出来事において自己限定的に開示される形に従って主／客の分節が決定されるのであり、主体は原理上、出来事に遅れて成立せざるを得ない。

以上が、世界・表現・主体をめぐる概念の基礎的布置である。ここに示されているのは確かに、表現的形成という様式で「自己自身によって動き行く」世界の自律的力動の根源性である。それは出来事の主権として刻々と我々を条件づけており²³、後期西田の思考はこのフィールドの上で、その思考自体もまたその「場所」に於てあるという自覚の中で展開されているのである。

追補 歴史と自由

ポイエーシス＝表現的形成という仕方で働く個物であるかぎり、我々は常に新たな物（歴史的事物ないし歴史的出来事）を生み出していると言えるが、それは大抵、見慣れた「形」のものであろう。まさに形とは自らを反復するものであり、たとえば「種」は「行動のパラディグマ（範型）」と言われるのである。また西田においては「習慣」も形概念系列に属する。要するに、我々は普通、様々な形の対応関係が張り巡らされた既存のネットワークの中を動いており、だからこそある程度の安定性・一貫性において、欲求を実現するよう行動したり、時間的見通しのもとで計画的に行動したり、あるいは自己や他者の行動を理解したりできるわけである。とすれば、真の新しさは、思いがけぬ対応関係の生成として、すなわち範型そのものを新たに打ち立てるような創造的出来事として到来せねばならないだろう。しかし、いかにしてか？

²³ 「真に直接の事実として自己自身に権威を有った事実と云うのは、限定するものなき限定として自己自身を限定するものでなければならない」（九・169）。

ところで、ポイエーシスにより作られた「物」たちはどうなるのであろうか？ それらは、「形を有ったもの」であるかぎり、独自の働きをなす単位として実在的である。言い換えれば、それらを作る運動の終わった後には、そのものとして自立し、そのものとして表現的形成的に働き得るものである。実に、このような「物」たちが織りなす世界が「歴史的世界」なのである。

「物が作られると云うことは物が過去に入ったことである、作られたものは死んだものである。しかし歴史的空間に於ては、それは単に無くなったのではない、見られるものとなったのである、表現的世界に入ったことである。而してそれは表現作用的に見られるものとして、表現作用的に作用を惹起することである、制作的に物が動くことである、作られたものから作るものへと云うことである、過去から未来へと云うことである」(八・285)

たとえば西田は、土の中から掘り出された石は、それが単に石(自然物)である限りでは何らの「歴史的意義」ももたないが、それが古代都市の礎石と考えられる時には「表現の意義を有つ」、すなわち「歴史を語るもの」、「嘗て有ったしかし今は無きもの」の内容を表すものである、と言う(七・239-41)。確かに、かかる痕跡(記号)としての「物」の表現がなければ、歴史の次元そのものが存在しないだろう。つまり、表現作用とは、いわば一度「死んだ」ものたちが再び自ら働くことのできる様式でもあるのである。

素朴な話にも聞こえるが、西田が創造性を見出しているはここなのである。それが、上の引用にもみられる「作られたものから作るものへ」というやや垢ぬけない術語で言われていることである。普通はまず「作るもの」(主体)がいて、それが作用して「作られたもの」(客体)が出てくるのであるが、それとは逆に、作られたものとしてそれを作ったものから独立したものが、再び作るものを(それを作ったのとは別の作るものであり得る)、表現作用的に限定・創出する(形成を媒介する表現となる)——このフレーズはそのような「逆限定」あるいは「円環的」(ループする——西田の術語で「直線的」と対をなす)動きを表示しているわけである。歴史的世界とはこのような物たちが潜在する場、「作られたものが作ったものから離れ、それが独立の物でありながら、而も作るものを作る」(八・339)世界である。そしてかかる非連続性を孕んだ物との出会い、行為的直観によって、「作るもの」=主体は作り変えられ、生成する——すなわち、蘇った「物」と「我」とが新たな「形」において対応し、新たな主体性が「惹起」される。

なお、三節で確認した事情から、「物」との新たな出会いは、厳密には、一種の遡及的な語り方でしか語り得ないことに注意せねばならない。ルイ・ド・ブロイを引用した科学哲学的記述がそれを印象的に示している。「スペクトル分析以前に白色の中に七色があったか。有った。しかしそれは我々が実験によって知り得るという意味に於てあったのである。歴史的空間に於てあったということであろう」(八・494)。別の個所では、同じ例がプラトンの「アナクメーシス」の独自の再解釈として述べられている(九・486)。つまり、「七色を含む白色光」は実験=行為的直観の出来事の形に従って自らの形を決定された「物」

なのであり、実験以前からそうだったのだ、と言うことの有意味性は、その物（の形）の存在が実験から遡って措定されることに存するのである。歴史的空間とは、生成した存在と秩序がそのように出来事から遡及的に登録されていく場所である。（「物」として措定された（作られた）以上は、その存在はもはや当の実験とか知覚に依存しているわけではない。）²⁴

いずれにせよ、かかる創造性が際立つのが、固有に「歴史的」と言われるような事象において、かつ言語的なものとの連関においてであることは見やすい。「言語文章という如きものは、それ自身が歴史的産物たると共に、歴史的内容を語るものとして最も自由に、最も適当なる表現ということができる、歴史は書かれたものとも云うことができる」（七・240）。すでに引いた遺跡の例のほか、西田は次のようにも述べている。

「非教会的意味に於てレグンデと云うものは、歴史的生命の形である。それはいつも昔と今とを結合するものとして働く。それによってのみ、聖徒と民衆と、英雄と百姓と、予言者と後世とが結合せられるのである。或偉大な人間の言行のレグンデと云うものは、日々新たに、生きて働きつつある映像である。……偉大なる歴史的人物の本質は、いつの時代にも知り尽すことはできない。その影像是色々に現れて行く、レグンデはいつも新に読まれて行くのである。……此点から、すべての歴史的出来事が、永遠に自己自身を現さない、而も永遠に自己自身を完成し行く、永遠なる形の自己形成と考えられるのである」（九・201-2）。

言語を通して出来事が再解釈され、過去と現在が新たに接続することで、新たな形の歴史的主体が形成される——それが逆に、出来事の意味を遡って与え返すこと、出来事の絶えざる生成でもある。「我々は単に我々の過去によって限定せられないのみならず、我々の後生涯が前生涯の意味を変ざることがある如く、我々の将来は過去の歴史の意味を変ざると考えることもできる」（七・258）。あるいは逆説的にも「作られたもの……絶対の過去に入ったものが未来の果から自己を引く」。それは過去からの一方的な決定でもなく、歴史を超越した未来のテロスから意味づけられるのでもなく、現在の具体的出来事の主権のもとで、我々が過去と出会い直すことである。かくして、真の新しさ、範型そのものの創造であるような出来事は、一度は「絶対の過去に入」って見失われたものとの予想もつかない呼応（形の対応）、すなわち反復、あたかも未来から過去がやって来たかのような反復として到来する。この意味で、西田は歴史を単に過去から未来へ移り行く流れではなく、「非連続の連続」「永遠の今の自己限定」と見なすのである。またそこにこそ真の主体性が世界に生起する余地がある——西田はある箇所、かかる「永遠の今」としての歴史的世界の有り方を「終末論的」と独特に形容しつつ述べている。「我々人間は終末論的存在として有るのである。それが人間の有り方である。故に人間のみが決断を有ち、行為を有つ」（六・

²⁴ ド・ブロイの事例も含めて西田の科学哲学的なアイデアを通覧したものとして、次のものがある。野家啓一「科学哲学者としての西田幾多郎」、『西田哲学会年報』第7号、2006年、1-17頁。

182) ²⁵。

我々が我々自身の権能から切り離された不透明な物たちに取り囲まれ、そうした物たちの自律的作用によって「作られる」歴史的存在であるということ、その事自体がまた、創造的自由の根拠でもあるのである。あるいは、西田はそれを人間の自由の意味だと考えるのである。「予定調和」を背景とするライプニッツのモナドロジーには「形成」「創造」が欠けている、との西田の診断も、以上のような観点に基づいていたわけである。

²⁵ 以上のような西田の歴史哲学と、ほぼ同時代を生きたベンヤミンの「歴史の概念について」との呼応には目をみはるものがある。Walter Benjamin, „Über den Begriff der Geschichte“, Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser (Hrsg.), *Gesammelte Schriften*, Band I -2, Suhrkamp, 1974, S. 691-704. 思うにここには偶然以上のものがある。西田もまた、彼の周辺（弟子）のマルクス主義の盛り上がりを感じ、自身マルクスを読みつつも、公式的な唯物論的歴史観・下部決定論を批判しているのである。これについてはいずれ詳しく論じたい。さしあたり、西田が最も詳しくマルクス（主義）的テーマを論じた論文「実践と対象認識」（『哲学論文集第二』、全集第八巻）を参照されたい。